



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

「俱会一処（くえいっしょ）」 わがふるさとお浄土

『本師聖人の仰せにいはいはく、
「某、親鸞、閉眼せば、賀茂川
にいれて魚にあたふべし」と
云々。これすなはちこの肉身を
軽んじて仏法の信心を本とすべ
きよしをあらはしますゆゑ
なり。これをもっておもふに、
いよいよ喪葬を一大事とすべき
にあらず、もっとも停止すべ
し。』（改邪鈔）

* * *

家庭で看取れなくなって久し
く、死を身近に経験することが
ないままその時を迎え、心の準
備も考える間もなくベルトコン
ベヤーに乗せられたように営まれ
きた葬儀ですが、今の無宗教、
散骨、樹木葬などという葬儀も
本質的には何も変わってませ
ん。問題にされるのは相変わらず
形だけで、本来の葬儀のもつ
意味である、生あるものが必ず
迎え乗り越えなけえなければな
らない「死」の解決が問われて
いないのです。

浄土真宗のみ教えは、「後生
の問題」「生死いづべき道」を
解決するのを本意としています。
浄土を共にし、現在を「正定聚
の私」としてお念仏の道を歩む
み教えです。その歩みの中での
「別れ」には、形や雰囲気

走るようなことを慎まなければ
ならないと説かれています。

別れは一樣ではありません。
長い人生を生き抜いて亡くなる
方、自然災害などで突然別れな
ければならなかった方、若くし
て親より先に亡くなることもあ
り、事件、事故によって生命を
絶たれることもあります。それ
も、今日か明日か、人が先か自
分が先かわかりません。それが
生死の真実だからこそ、生かさ
れている今を安心して人生を全
うしていける世界が確立されて
いなければならないのです。

それが、親鸞聖人が説き続け
られた「生死の一大事」「後生
一大事」、「極楽往生への道」
です。それは死にゆく人のため
というより今の私自身への問い
です。この問いの解決こそが仏
法との出遇いです。仏法に遇う
のは暗闇の中の非常口の光のよ
うな救いの道なのです。

大切な人の死には、その「い
のち」に代えてしか伝えられな
い大きなはたらきがあります。
葬儀や法事を、死を穢れと取り
畏れを取り除くために行ったり、
むやみに故人を美化する俗世の
価値観で行っているのは、故人の
尊厳と尊い死を無駄にすること
だと、親鸞聖人は強い言葉で言
い残されたのです。

* * *

バブルの余韻の残る頃、当時

の検事総長の『人は死ねばゴミ
になる』という本が話題になり
ました。知識優先の想像力から
は、死んだら「無」になるとい
う言葉に傾いてしまうのでしょ
うが、それは自分だけではない、
大切な人も死んだらゴミ箱に入
るのです。そんな死を穏やかに
迎えられないくらいの想像力は
あってほしいものです。

別れの辛さは今も昔も変わり
ません。親が死ねば子は悲しみ
の涙を流し、子に先立たれた親
の断腸の悲しみは計り知れませ
ん。夫が先か妻が先か、兄弟姉
妹や友とも、いつかは別離が待
っています。別れそのものが生
きていることの掟だからです。
だからこそ、私たちは再びお浄
土で出会うのです。「お浄土
がある」の「ある」は、たと
えば「明るい未来が待っている
」と思う時、誰もが「未来が
ある」ことを信じて疑わない、
この「ある」です。すなわち
「信」なのです。お浄土は娑
婆世界で親子となり、夫婦と
なり、友人となり、隣人とな
って縁を結んだ人々が、俱（
ともに）一つの処で会う「俱
会一処」の世界なのです。

お浄土は私たちのふるさと
です。そのふるさとお浄土から、
子供を案じる親のように、大
切な縁ある人々に「安心して
生きよ」とはたらきかける仏
と成る身を今約束されている
のです。 合掌

奏庵法座 彼岸会法要

日時
3月26日(木)
午前11時より

「み仏に抱かれて」
法話
住職
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

春のお彼岸を迎える今は、寒さに固まっていた体が徐々に緩まってきて、心身に温かさが蘇ってきます。古代の遺跡を見ても、ま東からのぼり、ま西に沈んでいくこの日の太陽を敬うように造られてあるのは、人類共通のいのちへの畏敬の念を、自ずから感じる季節だからなのでしょう。

お彼岸の集いです。春の陽気に連れられてゆっくりお寺に足を運んでいただき、お聴聞下さいますようお願いしています。

写真は2月26日のご法座
龍大・早島教授特別法話



募集

奏庵親睦旅行へのお誘い

《親鸞聖人関東伝道八百年・
北関東のご旧跡と那須温泉》

先月号に掲載しました通り参加者の募集をしています。旅行日は5月27日、28日、または、6月18日、19日、のどちらか。一泊二日。参加費は39,000円(全食事代込み)です。

逗子駅前より貸切バスでゆく楽な行程になっています。お友達やご家族を誘ってぜひご参加ください。詳しくは先月号に記載していますが、ご質問があれば奏庵までお問い合わせください。

心が和む日本の名言

いかなるが 苦しきものと
問ふならば
人をへだつる 心と答へよ
(良寛)

人を見下したり、差別する心は、相手だけでなく自分をも苦しめてしまいます。うまくいかないのはこの人のせい、あの人さえいなければ…、そうした否定的な感情にとらわれると、喜びや幸せがあっても気づくのが難しくなってしまうのです。この世に完璧な人はいません。人や自分の弱さを受け入れ、こだわりを捨て去れば、心が解放され大きく穏やかな心でよい関係を築けるようになるでしょう。

編集後記

またまた、根拠のない恨み思い込みによって、狭い集落の中で5人もの人が惨殺された。佐世保の女子生徒による同級生殺害、女子大学生による老女殺害、和歌山の少年殺害と奇怪な事件が多く起こる。■こういう類の事件が起きたとき、報道機関が未成年者や心神喪失者を保護しても、今はそれより早く興味をそそる情報となってネットに流れる時代になった。川崎の中学生殺害事件でも、週刊誌が被疑者の未成年少年の実名と顔写真を載せたことが問題となったが、被害者のあどけない顔ばかりが報道されるのに誰もが不公平感を感じていただろうし、ネットに流れるおぞましい「ガセネタ」を思えばきちんと報道された方がいいようにも思う。■殺された中学生は不登校になっていて「殺されるかもしれない」とサインを出していた。佐世保の女子高生の「人を殺したい」という言葉を親も医者も聞いていた。淡路島の犯人の親は入院隔離を望んでいたが退院させられ、警察や保健所に相談し、近所へも警戒してくれるよう頼んでいた。これだけのサインが出ていても肝心な一歩が踏み出せず防げなかった原因は何なのだろう。■それを妨げている一因には、そこに横たわる「人権」というものの扱いの難しさがあると思う。昔は危ないと思えば、それこそ「座敷牢」に入れたものを、人権がうたわれるようになって、家族も警察も教師も医療施設も隣人もみなが出来の限り普通に接しなければ民主主義者としての教養が問われるようで腰がひけているのだ。■人権は、「人間に当然与えられるべき権利、生命、自由、名誉などを享受する権利」とあるが、人それぞれが享受出来るものは決して同じではなく、そんな中でほとんどの人が大罪を犯さず人生を全うしている。人を殺めた者はたとえ刑期を終えたとしても罪を背負って生きていってこそ真の更生だ。償いの思いは、刑の重さにも、未成年者も心神喪失者も関係なく、人間である限り忘れてはいけない。人権が憲法にうたわれていても、その人権を護るのはまず自分なのだ。 Norimaru